

文部科学省委嘱令和5年度幼児教育の理解・発展推進事業

幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会

I 目的

幼稚園・こども園の教育課程編成及び実施に伴う指導上の諸問題並びに幼児教育を取り巻く諸課題についての専門的な講義や研究協議等を行い、教職員の指導力を高め、幼児教育の振興・充実を図るため、幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会を開催する。

II 日程及び会場 令和5年7月26日(水) 9時15分～16時30分 小田原合同庁舎

9:15 受付

9:30 開会 挨拶

9:40 講演 「幼児期において育みたい資質・能力を踏まえた教育課程の編成と小学校教育への円滑な接続の推進について」

講師 文部科学省初等中等教育局幼児教育課 幼児教育調査官 横山 真貴子 氏

11:45 事務連絡

12:00 昼食・休憩

13:15 分科会受付

13:30 分科会開始

13:40 提案1

14:10 提案2

14:40 休憩

14:55 分科会協議

・グループ協議

・全体共有

15:55 指導・助言

16:15 閉会 挨拶 (各分科会ごと) *アンケート記入

【提案】

●幼稚園の教育課程の編成及び実施等に伴う

諸課題等についての研究協議

分科会1 (共通協議主題)	〈提案1〉箱根町立仙石原幼児学園 〈提案2〉厚木緑ヶ丘幼稚園
分科会2 (協議主題1)	〈提案1〉秦野市立ほりかわ幼稚園 〈提案2〉江川幼稚園

● 協議主題と協議の視点

分科会1 (共通協議主題)	「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について ①幼児教育施設と小学校の先生方が、それぞれの保育・教育への理解を深め、架け橋期のカリキュラムを協働して作成するためには、どのようにしていけばよいか。 ②「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論をもとに作成予定の架け橋期のカリキュラムと教育方法の手引き(仮案)や参考資料等を踏まえ、子供の発達や学びの連続性を確保するため、各園や学校としてこれから何に取り組んでいく必要があるのか。
分科会2 (協議主題2)	指導計画の作成、保育の展開、指導の過程の評価・改善について ①幼児の発達に即して一人一人の幼児が幼児期にふさわしい生活を展開し、必要な体験を得られるように指導計画を作成するには、どのような工夫が必要か。 ②具体的なねらい及び内容を設定し、適切な環境を構成するに当たって、どのようなことを考慮する必要があるのか。 ③幼児が望ましい方向に向かって自ら活動を展開していくことができるよう、先生はどのような姿勢で援助をする必要があるか。 ④幼児の実態等に即して指導の過程について評価を適切に行い、指導の改善を行うためには、どのような工夫が必要か。

Ⅲ 分科会の記録

令和5年度幼児教育の理解・発展推進事業（幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会）研究成果の要旨

分科会1 (共通協議主題)	「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、 幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について
------------------	--

1 提案内容 箱根町立仙石原幼児学園〈提案1〉

(1) 研究主題のとらえ方

箱根町では、平成21年度に箱根町園小連携推進委員会が発足し（現在は、園小架け橋推進委員会）、名称や構成員を変えながら、幼保小（以下、「園小」という。）のより良い連携や接続のあり方について検討し、活動を進めてきた。また、平成27年度から、箱根町は少子化に対応した教育を実践するため、分離型の園・小・中一貫教育に取り組んでおり、現在は、既存の「アプローチカリキュラム」と「スタートカリキュラム」を基に、箱根町としての「架け橋期カリキュラム」の作成を検討しているところである。

本園は、0歳児から5歳児までの全園児で55名の園であり、卒園児のほぼ全員が隣接する仙石原小学校へ入学する。本園と小学校は、日頃より校庭の一部や遊具を共有するなど、交流に適した関係にある。コロナ禍においては、これまで行っていた職員や子ども間の交流活動ができない状態が続いたが、昨年度より、必要な感染症対策を行いながら、日常的な施設の利用や計画的な交流活動を再開することができた。しかし、架け橋期の重要性について職員間の温度差があり、過去の交流を踏襲した形式的な交流となってしまう、子どもの育ちや学びをつなぐことには課題が残った。

そこで、今年度は園と小学校で交流や接続の在り方について実質的な話し合いや実践を重視し、具体的な取組を可視化していくことにより、園小互いの教育と実践を深め、今後における架け橋プログラムの検討と改善を図ることとした。

(2) 研究の方法及び研究の重点

- ①園内における架け橋期の共通理解
- ②園小相互理解
- ③互恵性のある交流の推進
- ④交流の様子の見取り

(3) 研究の内容

①園内における架け橋期の共通理解

これまでの園小連携、接続における取組について振り返り、園職員による成果と課題を出し合った。交流の積み重ねにより、小学校に対する不安感が和らぎ、安心感や期待感へと変わっていることや、交流によっては幼児、児童主体の場面が見られていることは大きな成果である。どのようなねらいをもち、学びをつなげていくのか、交流やカリキュラムの内容を再検討することが必要である。また、全職員への周知と互いの教育の理解については、共通理解の方法を具体的に考え、計画、実践していく必要がある。

また、架け橋期に育てたい子どもの姿、小学校へつなげたい子どもの育ちについて、園職員の理解を深めるために「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」を読み、架け橋期に育てたい子どもの姿や、園で大事にしたい保育者の役割について協議し、再確認した。

②園小相互理解

年度が替わり、園小全職員が集まることのできる貴重な場を有効活用し、園小の顔合わせを行う。架け橋期の連携推進の目的について共通理解を図ると共に、テーマ別に協議の場を設けた。自己紹介や協議等を通してお互いを知ることで、気軽に話しやすい関係作りにつながった。また、架け橋期のカリキュラムに取り組む意義を伝える場となり、全職員の意識啓発を図る良い機会となった。

そして、「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」掲載の『進め方のイメージ』を参考にアンケートを作成、実施した。結果からフェーズの確認、園小での意識を比較し分析を行った。

さらに、互いの保育や授業を参観する機会をつくり、参観の視点を具体的に示して、互いの教育の理解を深めた。

③互恵性のある交流の推進

でに育ててほしい10の姿」や幼保の子どもの学びが小学校でどう発展していくのか、などを実践的に研究し、幼保小接続のより一層の充実を図ることとした。

(3) 研究内容

提案者（現在園長）は、中学校校長を定年退職した後、昨年度副園長として採用された。現役時代は小・中学校での教職のほか、厚木市教育委員会での勤務経験もあり、今回公開保育の実施に向けて、市内小学校への趣旨説明や参加依頼についても、顔の見える関係での働きかけができ、教育委員会や小学校管理職の参加に寄与することができた。

①日 時 令和5年1月20日（金） 午前9時30分～午後3時

②目 的 幼児教育の質の向上と幼保小の円滑な接続のための活発な議論を通して、子どもたちの学びの基盤を育み、質の高い幼児教育を進めてその成果を小学校に繋げる。

③協議テーマ 「主体的・対話的な深い学びとは何か～望ましい幼保小の連携を見据えて」

④参加者 厚木市内小学校・保育園・幼稚園・行政関係者 計86名

⑤プログラム

プログラム	参加者
i 来賓挨拶・紹介	厚木市教育委員会・厚木市こども未来部
ii 保育参観（50分）	満3歳・年少・年中・年長の8クラスを公開
iii 全体会（45分）	小・保・幼の代表者及び厚木市教育委員会から情報提供
iv 分科会（50分）	9グループに分かれて意見交換会
v まとめ（60分）	國學院大學准教授 吉永安里先生の講話

⑥全般的な感想（抜粋）

・子どもたちが自分で好きな遊びを選び、楽しみながら過ごす姿が印象的。先生方の声掛けも優しく子どもたちも落ち着いていた。子どもの話す・聞くなどの切り替えが出来ていて自園の改善点を見つけることができた。

（幼稚園）

・今日の研修を通して、幼稚園・保育園と小学校がそれぞれの教育カリキュラムや指導要領などを相互に共有し、繋がりをもたせる連携が必要だと思った。（小学校）

・緑ヶ丘幼稚園の環境は子どもたちにとって本当に魅力的な環境がたくさんあり、自分自身もっともっと努力しなければと思った。（保育園）

・園内にわくわくするようなコーナーや遊具がたくさんで、よい学びになった。幼稚園・保育園で生き生きと活動した子どもたちが小学校でも同じように自分のありのままの姿を出して過ごせる架け橋期のカリキュラムがあるとよいと感じた。このような研修の機会がもっと多くの現場の先生に与えられるよう努めたい。（幼稚園園長）

・緑ヶ丘幼稚園では、発達段階に応じた活動が行われ、緩やかな時間の中で自然に活動している姿が顕著に見られた。これらの活動を小学校6年間にどう繋げて育んでいくかを考えさせられた。これを機にもっと活動連携や意識の連携を高めていきたいと思う。（小学校校長）

(4) まとめと今後の課題

①成果

・文部科学省の「架け橋プログラム」の考え方を現場で認識し、幼保小連携をスタートする良い機会となった。

・市内の小学校や保育園の管理職をはじめ多くの先生方が一堂に会し協議することができた。

・これまでの形式的な連携を見直し、各施設が立場を超えてより顔の見える連携（交流行事やスタートカリキュラムなど）について共有することができた。

②今年度の新たな取組

・小学校新採用教員、特別支援担当教諭研修を活用した保育参観の導入

・小学校高学年児童音楽発表会を年長園児が見学

③今後の課題

・架け橋期が生涯にわたる学びや生活の基盤を作るために重要な時期であるということを連続的な連携として、幼保小が相互理解していく。

・小学校や各自治体教育委員会への調整がスムーズに進むような人材確保。

・配慮の必要な子どもをはじめ、入学に向けてのよりきめ細かな情報交換の実施。

・各自治体（行政）のバックアップ及び幼保小連携のしくみづくり。

3 研究討議内容

【視点①】 幼児教育施設と小学校の先生方が、それぞれの保育・教育への理解を深め、架け橋期のカリキュラムを協働して作成するためには、どのようにしていけばよいか。

- ・まずは、互いのことを知ることが大事である。そのためには、幼児教育施設と小学校がコミュニケーションをとりやすい環境も必要になってくる。地域差があるため、コミュニケーションを図る工夫を考えたい。
- ・幼稚園、小学校で、スタートカリキュラム作成の意図や意味を共有するとともに、教員が替わっても継続していける体制づくりをしていく必要がある。
- ・年度はじめに顔の見える関係をつくり、相互理解を深めたい。それが持続可能な関係を構築することを可能にしていくのではない。
- ・行政の支援のもとで、各幼稚園、小学校で、まずは管理職を中心に連携し、教職員に道筋を示していく。
- ・他の業務もある中、互いに集まることが大変な場合もある。それぞれが作成したカリキュラムを交換して見合いながら進めていくのも一つの方法である。
- ・幼稚園、保育所と小学校がそれぞれのカリキュラムや指導要領などを相互に共有し、つながりをもつなど、連携が必要である。
- ・小学校の学区には、多くの私立幼稚園、こども園、保育所等があり、連携の難しさがある。コロナ禍で交流ができない期間も長くなり、カリキュラム作成まで十分にできない実態もある。だが、行政や管理職のリーダーシップのもと、関係機関の交流を計画的に進めていく必要がある。
- ・「社会に開かれた教育課程」の実現に向け、保護者、地域も巻き込んだ「架け橋期のカリキュラム」の作成をめざす。

【視点②】 「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論をもとに作成予定の架け橋期のカリキュラムと教育方法の手引き(仮案)や参考資料等を踏まえ、子供の発達や学びの連続性を確保するため、各園や学校としてこれから何に取り組んでいく必要があるのか。

- ・園でできていたこと、育ってきたことを小学校が把握し、日頃の教育に生かすようにする。
- ・互いの教育の場を参観する機会を作るようにする。見る側、見られる側、どちらも理解を深めることができる。また、理解した内容は、今後の教育に反映させることができる。
- ・教員の思いありきにならないように留意し、子どもが「やりたい」と心から思い、主体的に取り組めるような配慮をしたい。
- ・交流が形式化したり、幼稚園と小学校の温度差を感じたりすることがあるため、そのギャップを解消するところから改善していきたい。
- ・10の姿を共有するためにも、幼稚園、保育所、小学校の連携は大切である。幼児教育を中心とした幼稚園と保育所との連携もきめ細かにできるとよい。
- ・幼稚園、保育所と小学校の情報交換などが保護者対応に生かされていない面もある。せつかくの情報交換なので有効に活用できるとよい。
- ・幼稚園、保育所、小学校の直接の交流は、相互の理解に意味があるので続けていきたい。
- ・幼稚園、保育所は遊びから学ぶことが主流だが、小学校では1人1台端末を導入し学習に活用しているので、今までと指導が変化しているところを幼稚園、保育所の教員に見てほしい。
- ・幼稚園、保育所で生き生きと活動した子どもたちが、小学校でも同じように自分のありのままの姿で過ごせるよう、架け橋の一員になれるような教員の育成も必要である。
- ・幼稚園、保育園、小学校の教員が集まって協議する機会を増やすことも必要である。行政として、多くの現場の教員が研修や協議会などへの参加できるよう努めたい。
- ・提案園の実践では、発達段階に応じた活動が行われ、緩やかな時間の中でねらいに合った活動を自然に行っている姿が顕著に見られた。これらの活動を小学校6年間にどうつなげて育んでいくかが課題である。資質・能力で子どもたちの姿を語れるような活動や意識の連携を高めていきたい。

【まとめ】

- 架け橋期のカリキュラムを協働して作成するためには、年度当初に、幼稚園と小学校の教職員が顔を合わせる機会をつくり、子どもたちの実態や目指す子ども像を共有することが大切である。行政の支援のもと、幼稚園と小学校が同じ目標やビジョンをもって、カリキュラムを作成していく。
- カリキュラムを作成することを通して、子どもたちを主語にして語り合い、円滑な接続をめざしていく。作成することのみが目的にならないようにする。
- 子どもたちの主体性を大切にし、その主体性を支える環境を整え、子どもの学びをつないでいくことが教員に

求められている。幼児教育施設と小学校の円滑な接続はもとより、地域の幼児教育施設同士の横の連携も必要である。

- 架け橋プログラムについて、園や小学校の関係者だけでなく、保護者、地域にも正しく理解されるよう発信を続け、5歳児と小学校1年生の特性に配慮しながら、学びの連続性をめざしていく。
- 「コミュニケーション」「見通し」「行政との連携」等、それぞれの地域でできることを見つけていくことで、新たな一歩となるのではないかな。

4 指導助言

- 箱根町で幼稚園、小学校の接続に関する組織が立ち上がっている。行政のバックアップがあることは、心強いことである。
- 年度当初に、幼稚園と小学校の教職員が、顔を合わせる機会を設けたことは、全教職員の意識付けとなるであろう。グラウンドを共にする好条件を存分に生かしてもらいたい。
- 幼稚園と小学校が、同じ方向性をもつことで、課題も見えてきた。
- 子どもたちのやりたいことを大切にしながら、今後も進めていけるとよい。
- 架け橋プログラムについて、よく理解した提案であった。今後も、5歳児と小学1年生の特性に配慮しながら、学びの連続性を目指してほしい。
- 「コミュニケーション」「見通し」「行政との連携」等、他の地域でも、まずは、できることを見つけていくことで、新たな一歩となるのではないかな。
- 幼稚園・保育所と小学校間において、どう関係を築いていくかということである。協議の中においても、【お互いを知る】【分かり合う】【交流する機会をつくる】等、多くの意見が出たのではないかな。前向きにお互いを知っていきこうという気概に満ちているので、引き続きこの思いを各地域での幼保小接続に向けてほしい。この協議会に参加した方のアクションが重要である。また、具体的な接続方法や内容について方向性を定める必要がある。研究協議の場である以上、そこには【妥当性】【現実性】【再現性】が必要である。
 - 【妥当性】研究協議の内容が妥当性をもつかどうかということである。提案者2名の発表をもとに幼小接続について話し合うこと＝妥当性があるということであり、協議会に参加された方全員もこの妥当性の有無について、承認者となっている。
 - 【継続性】研究ありきではなく、また、単発に終わってはいけない。どう継続していくべきかが重要である。この継続性については、より深い議論が必要である。
 - 【再現性】どれだけ素晴らしいことをしたとしても、他の地域や参加者にも再現できるかどうかの視点をもつことが肝要である。地域によって事情は異なるため、できる部分はやり、できない部分は工夫しつつ近づけることも必要である。重要な視点は、当事者が使命感を持ち、どこまで再現できるかをしっかりと見定めることである。
- グループ協議において述べることや考えることは簡単だが、実際にやるとなると、相当な労力、忍耐力が必要になる。また、幼保小接続という業務にどこまで時間を割くことができるのか。これについては、園長校長のリーダーシップで左右される。現場の先生が非常に忙しいことは周知の事実であるので、単純に業務を増やすのではなく、どう時間をつくるのかを管理職以上は検討する必要がある。学校や園によって実情が変わるが、原理原則は変わらないので、「10の姿」という共通言語を基に、フォーマルな場、インフォーマルな場で話し合うことがよいのではないかな。

分科会2 (協議主題2)	指導計画の作成、保育の展開、指導の過程の評価・改善について
-----------------	-------------------------------

1 提案内容 秦野市立ほりかわ幼稚園〈提案1〉

(1) 研究主題のとらえ方

質の高い教育を展開するためには、環境を通して行う教育を基本とし、幼児期にふさわしい生活の展開、幼児の自発的な活動として遊びを通しての総合的な指導、一人一人の特性に応じた指導に留意し、発達に必要な体験を得られるようPDCAサイクルを活用し、組織的かつ計画的に進めていくことが大切である。

そこで本園では、幼児一人一人を理解することを基本と考え、それぞれの特性を的確に理解、把握していくこと、幼児の各時期の発達の特性を踏まえ教育課程に沿った組織的、発展的な指導計画を作成し保育を展開していくこと、そして指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人の良さや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすることを念頭に研究を進めることにした。

(2) 研究の方法及び研究の重点

- ①幼稚園教育要領のねらいや内容を理解し、年齢に応じて重点化を意識しながら指導計画を作成していく。
- ②記録を基に幼児理解を深め、指導の在り方の改善を図る。

(3) 研究内容

①幼稚園教育要領のねらいと内容の理解と重点化

- ・幼稚園教育要領のねらいと内容を読み解き、4歳児・5歳児の発達を踏まえた内容を考え、重点をおく学年に◎を付け、明確にした。

(例)

	内 容	4歳児	5歳児	5歳児に重点をおいた根拠
人間関係	(7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。	○	◎	遊びや生活を共にすることで、次第に互いの心情や考え方などの特性に気付き、互いの良などが生かされ、一緒に活動する楽しさが増してくる。

②一斉と個別を意識した週日案・日案の様式を検討する。

- ・幼児一人一人の発達や特性に合わせて姿を予想し、より丁寧に援助を考えていく。

ア 週日案

【旧様式の課題】

- ・全体に向けた共通の姿・援助しか書かれていない。
- ・加配対象児の援助が記入されていない。

改善点

【新様式】

- ・教師の援助を細分化して明記する。

(日案と共通) ↓

- 全体に向けた援助・環境構成
- 全体の姿に当てはまらない幼児に向けた援助・環境構成

- ・加配対象児への援助を記載する。

イ 日案

【旧様式の課題】

- ・一人一人の行動と理解に基づいた指導計画になっていない。

改善点

【新様式】

- ・個別の援助が必要な幼児（加配対象児を除く）の姿・援助を記載する。

↓

- [A児 ～～できるように、～～する。]

③幼児理解と指導の改善

- ・記録を基に幼児理解を深め、指導の在り方の改善を図る。

ア 全職員による幼児の記録

- ・毎日の幼児の姿を、5領域の中のどのねらい・内容の観点から捉えるかを定める。
- ・幼児の姿を付箋に記入し職員室に掲示することで、全職員で共有できるようにする。

イ エピソード記録を基にした指導の改善

- ・日案を作成し、エピソード記録を書くことでその日の保育を振り返る。
- ・全職員でエピソード記録から幼児の姿の読み取り、指導の改善方法を考える。

ウ 日々の記録を基にした指導の改善

- ・日々の記録から個々に必要な援助を幼稚園教育要領の領域ごとに考え、指導計画を立てる。
- ・エピソード記録をもとに3つの視点から評価を行う。(ねらい・内容、環境構成、援助)
- ・評価したことから指導計画のねらい・内容、環境構成や援助の仕方を修正していく。

(4) まとめと今後の課題

- ・幼稚園教育要領を丁寧に読んでいく中で、「幼児一人一人…」という言葉が教育要領のいたるところに記載されていることに気付き、改めて幼児一人一人の発達の特性を理解し、その特性や発達の課題に応じた指導をすることの大切さを再確認することができた。
- ・今まで週日案、日案にはクラス全体に対する環境構成及び教師の援助を中心に記載していたが、幼児一人一人

の発達特性を留意することが大事だと考え、新たに個別に対する環境構成及び教師の援助を加えることにした。そうすることで、クラス全体だけでなく個別を意識した指導の方向性が明確になり、より確かな一人一人の成長を促すことができるようになってきたと感じる。

- ・エピソード記録を作成し、全職員で意見交換をすることで、多様な考え方、見方があることに気付き、指導方法の改善を図ることができてきた。
- ・毎日のねらいを意識して幼児の姿を観察していくことで、幼児の新しい一面に出会う場面が増えるとともに保育を見直すきっかけになった。また幼児の発言を今まで以上に注意深く聞こうとする意識が高まってきた。
- ・毎日、多様な場面での幼児の姿を記録するとともに、記録を基に全職員が話し合うことを通して職員間の交流ができ、幼児理解が深まることで指導の在り方の改善につなげていくことができるようになってきた。
- ・今後はさらに研究を進め、実践を通して検証をしていきたい。

2 提案内容 江川幼稚園〈提案2〉

(1) 研究主題のとらえ方

幼稚園教育要領では指導計画の作成は園児の発達に即して乳幼児期にふさわしい生活展開し、必要な体験を得られるよう具体的に作成するとある。本園では、年長児が行った「江川こども縁日」についての指導計画として幼児理解・保育の展開・保育者の援助・評価と改善について研究していく。

(2) 研究の方法及び研究の重点

- ①行事活動「江川こども縁日」におけるこどもの活動の姿及び発達について考察し、計画の評価・改善を考える。
- ②保育者の関わりや援助及び保育者同士の連携について考える。

(3) 研究の内容

①これまでの年長児の育ち

新学期、クラス替えをして新しい友だちや保育者との生活が始まる。新入園児に対して身支度の手伝いをしたり、泣いていると言葉を掛けたりして、積極的に関わろうとする姿がある。また、当番活動や園生活の中で都度友だちやクラス全員で話し合いをし、解決できるようになる。友だちの意見に耳を傾けたり、自分の意見を言葉で伝えたりして、譲ったり、譲られたりと様々な経験をしてきた。

②保育のねらい

- ・子どもたちが「楽しい縁日を自分たちで開催する」という共通の目的をもち、計画準備の段階から主体的に参加し、その中で仲間と一緒に考え合ったり、工夫と協力を重ねたりしながら自分の役割を成し遂げようとする。
- ・招いた人が楽しんでいる様子に気付き、それらを喜びややりがいとして受け止め、達成感や充実感と共に奉仕の気持ちが育つ。

③実践報告

【5月5週目 年長組クラスごとに話し合い】

- ・今までに経験した「江川こども縁日」について、覚えている事を出し合う。すると今年は「自分たちがやろう」という意識になる。「今年はどんなことをやろうか」「どんなことがやりたいか」を問いかけると子どもたちが多くの意見が出る。
- ・年長児の意見をもとに職員で会議し、遊びの種類や難易度、バランスを考慮し、5つの店舗を決定する。
- ・決定したことを年長児に報告し、この中で担当したい店を考える。

【6月1週目 担当決め 店舗ごとの話し合い】

- ・一つの店舗を8～10名程で担当する。
- ・保育者の関わりとして、年長児全員がやりたい担当になれるように配慮する。
- ・店舗ごとに集合し、どんな店にしたいか、どんな遊びができるのか、おみやげや景品はどうするか、またいくつくらい必要か、開店するには何が必要かなどを話し合う。

迷路店の実践報告

【どのような迷路にするか】→「トンネル」「虫」「おばけ」「にせ扉」「回転扉」「落とし穴」など発案がある。保育者は、子どもたちの意見を絵に描いたり、試しに作ったりと子どもたちとイメージを共通理解する。必要な物を準備する。

【迷路を作る】→段ボールの板を実際に見ながら、廃材や教材を使って飾りを作る。保育者は子どもたちのアイディアとイメージが共有理解できるよう、完成図を作成する。

【準備期間が足りない】→思っていた以上に段ボール板の面積が広く、飾りが足りなくなる。縁日当日までの見

通しがつくよう、保育者が子どもたちに伝えたと、登園したら自主的に集合して迷路の準備をするようになった。また、その姿を見て、ほかの園児も迷路店に興味をもって当日に期待する子が増えた。

【迷路完成】→保育者が当日の係分担の提案をすると、子どもたちのほうから「スタート係」「ゴール係」「途中のスタンプ係」を提案。保育者は途中で交代しながら、どの担当にもなれるよう配慮した。

【江川こども縁日の開催】→当日までに園日より4枚や参加カード、スタンプカード、おみやげ券を配布し、全園児が期待をもって参加できるようにする。

【アンケートの実施】→後日、全園児保護者に向けて、アンケートを実施。そこには、年長の子どもたちへの感謝、慰労、労いの言葉が多く書かれていた。その内容を年長児に読み聞かせることで、嬉しさや達成感、成し遂げたことへの充実感を実感していた。

④この活動を通して、子どもが学んだこと

- ・友だちと協力して実現することのおもしろさや、お客さんを喜ばせるために「かくし扉」や「のぞき穴」を作り、喜んでもらえたことへの嬉しさ、楽しさを感じていた。また製作時間が足りなくなり、急いで作り、当日のお客の多さに戸惑いながらも声を掛け、スタンプを押すなど役割の大変さも感じているようだった。その場にあった言葉の掛け方や喜んでもらうにはどんなことをしたらよいかを考え行動していた。
- ・主体的に参加し、友だちと一緒に考えたり、工夫したり、協力して縁日を開催することができたことに対する達成感や充実感を感じていた。

⑤昨年度と今年度の違い

ねらいについては、同じである。しかし、昨年度はコロナ禍であり、休園にならずに活動ができるか、行事当日を迎えられるかを心配しながら日々生活をしていた。その中で活動だったので、1回の話し合いや製作時間を30分以内にするこことや、ある程度の間隔(広さの確保)、異年齢の交流を控える等の配慮が必要であった。その中で、保育者は子どもたちが主体的に活動ができるように、保育者が子どもたちと一緒に活動に取り組んでいた。

今年度は規制も緩和され、活動時間を延ばし、話し合いの時間も多く取り入れることができた。年長児が準備をしている様子を年下の子どもたちが見て、縁日に期待をもち、その姿に年長児が張り切る姿も多く見られた。

(4)まとめと今後の課題

この活動、行事を経験して、子どもたちは店の企画、準備、開催の楽しさや大変さ、協力することのおもしろさや困難さ等、多面的に感じながら取り組んでいたと思われる。さらに、店員とお客の両方を経験することで、両方の役割の気持ちを味わうことができ、子どもたち同士で話し合っって役割分担をする等、年長らしい姿が発揮されていた。コロナ感染対策の緩和に伴い、活動に取り組ませる際の対応や配慮も緩和され、今年度は一層活動の自由度が増し、関わりや対面での会話を可能とする時間も増やして実施が出来た。

この行事の実施を経て感じることは、保育者の予想を超えて年長児一人ひとりの行動力や自発的な態度が発揮され、保育者の指示を待つよりも先に、子ども相互に関わり合う状況が生じるということである。私たち保育者は、子ども一人ひとりの個々の成長過程を踏まえて、次期の指導計画、指導課題に丁寧に向き合い、そして保育者の関わりを成長課題に即して適切に与える事が重要であると改めて考える。

年長児はこの行事を経験し、7月中旬(1学期末)にある2泊3日の「宿泊キャンプ」に繋げていく。1期2期の経験からの育ちから、引き続き「自分の気持ちを色々な形で表現する」「様々な遊びや活動に意欲的に取り組もうする態度」「仲間と協力し合い、困難を乗り越える経験」を課題にした年長児の活動の中で、ふさわしい指導や関わりを考えていきたい。

3 研究協議内容

【視点①】幼児の発達に即して一人一人の幼児が幼児期にふさわしい生活を展開し、必要な体験を得られるように指導計画を作成するにはどのような工夫が必要か。

- ・幼稚園教育要領の理解や教育課程の見直しを行う中で、適切な環境構成と年齢や発達に応じた内容にしておくことが大切である。ねらいや内容を考えていく上で、その日に見られた子どもの姿を話し合える職員同士の環境や時間が大切である。
- ・一人一人と丁寧にかかわり、指導計画の中に位置付けて可視化していくことが大切である。

【視点②】具体的なねらい及び内容を設定し、適切な環境を構成するに当たって、どのようなことを考慮する必要があるのか。

- ・入園から卒園までを見通し、全職員で全園児を見ていくために記録を可視化して共通理解を図っていく。
- ・実践の発表では、個に応じた援助を行って、子どもたちにかかわろうとしていることがよかった。その日のねらいを5領域に当てはめて立案したり、その日の状況を全職員で共有したりすることも大切である。

- ・実践の中で、具体的な子どもたちのイメージを取り上げ、教員がどのようにアプローチしていったらよいかを全職員で共有している姿がよかった。
- ・園には、配慮や支援が必要な子どもたちがいる。従来の週日案の形にとらわれず、個別のかかわりを丁寧に取り入れた指導案を作成していくことで、より丁寧に子どもたちとかかわっていくことができるのではないかな。

【視点③】幼児が望ましい方向に向かって、自ら活動を展開していくことができるよう、先生はどのような姿勢で援助する必要があるか。

- ・広い視野で多面的に子どもを見ること、職員同士で情報交換をしやすい雰囲気づくりを行うこと、そして、語り合える時間の確保が大事である。
- ・幼児の興味や関心はどこにあるのか、今何を考えているのかを見取る必要がある。計画していても、実際に活動すると違う展開になることがあるため、教員は柔軟に対処し、引き出しを多くもつことが大事なのではないか。
- ・教員の援助について、幼児がやりたいと思ったことを実現できる姿勢をもつことが大事である。
- ・講演会の話にあったように、教員自身がわくわくした環境や状況をつくり出すことが大切である。
- ・行事などでは、子どもの成長につながるように主体性をもたせていくことの難しさを感じたので、園で話し合っ解決していきたい。
- ・幼児理解を深めて、主体性をどう育てていくかを職員間で意見交換していきたい。また、保護者との連携が大切であり、園の活動をドキュメンテーションで知らせることも必要である。
- ・幼児の姿を見取り、幼児がやりたいと思った遊びや活動を実現していくこと、幼児を複数で多面的にとらえること等が大切である。短い時間であっても、職員室で幼児のことが話題になることが幸せである。

【視点④】幼児の実態等に即して指導の過程について評価を適正に行い、指導の改善を行うためには、どのような工夫が必要か。

- ・評価改善については、毎日のねらいを意識していくこと、PDCAサイクルで評価改善をしていくこと、一人一人と丁寧にかかわっていくことが大事である。
- ・学期ごとに計画を振り返るが、特に週案の改善をして指導計画に立ち返っている。ICTを積極的に使い、タブレット等を用いて職員同士で共有している
- ・子どもたちを取り巻く環境は、コロナ禍で人や地域とのかかわりが希薄になっていた。幼児が興味・関心をもっているものは何か、計画する上で安全であるかなどを考えながら保育を進めていくことが大事である。
- ・子どもたちを「できる」「できない」で評価するのではなく、子どもたちが遊びの中から、どのようなことを学んでいるのかを価値付けしていきたい。

【まとめ】

- 幼稚園教育要領を丁寧に読み解くと、「幼児一人一人…」という言葉が教育要領のいたるところに記載されていることに気付く。改めて幼児一人一人の発達の特性を理解し、その特性や発達の課題に応じた指導をすることの大切さを確認していく。
- 週日案、日案にはクラス全体に対する環境構成及び教員の援助を中心に記載しているが、幼児一人一人の発達の特性を留意することが大事である。そこで、新たに個に対する環境構成及び教員の援助を加えて記載することも考えられる。クラス全体だけでなく、個を意識した指導の方向性が明確になり、より確かに一人一人の成長を促すことができるようになる。
- エピソード記録を作成し、全職員で意見交換をすることで、多様な考え方、見方があることに気付く。その気付きが、指導方法の改善を図ることにつながる。
- 毎日のねらいを意識して幼児の姿を観察していくことで、幼児の新しい一面に出会う場面が増えるとともに、に、保育を見直すきっかけにもなる。また、幼児の発言を今まで以上に注意深く聞こうとする意識も高められる。
- 参加していた小学校教員から、今回、幼児の新たな一面を学んだと感想があり、小学校との連携、協働をより一層進め、幼児理解、児童理解に努める必要がある。

4 指導助言

- 幼稚園教育要領のねらいと内容の理解と重点化では、4・5歳児の発達を踏まえた内容を考え、重点を置く学年を明確にした。そのことにより、指導計画作成にあたり、幼稚園教育要領との関連性がより分かりやすくなり、指導の過程の評価、改善にもつながっていくと思われる。
- 週日案・日案の作成では、幼児一人一人の発達の特性を留意することが大切であると考え、個別の発達や特性に合わせた援助を加えていった。クラスの中に、個別の支援を必要とする園児が増えている状況があり、幼児

の特性に合わせた援助や環境構成を明記することは、保育を進めていく中で、たいへん重要になっている。また、複数担任での保育を進めるうえでも共通理解がしやすく、大きなメリットがあると考えられる。

- 全職員による幼児の記録（付箋による記録）では、5領域のねらい、内容の観点で捉えて記入することによって、指導計画や週日案に立ち戻って考察することができ、今後の指導の重点を導き出すことにつながると思われる。また、貼られた付箋を通して、複数の職員で姿について話し合うことで、多面的に見ることができ、幼児理解も深まると思われる。
- エピソード記録や、日々の記録を基にした指導の改善に関しては、多くの職員での検討により、様々な読み取りが出てきている。このことが指導の評価につながり、改善点を導き出している。しかし、資料作成及び事例検討には多くの時間を要していると思われるので、継続していくには、効率よく事例検討できるような工夫が必要となる。
- 江川幼稚園で過去44年間行っていた夏祭り（神輿）行事がコロナ禍に入り、行えなくなったことから新しい発想での縁日行事であった。年長児の発達、役割を捉えた上で話し合いをしている。言葉での表現、伝達する力、協調性、妥協、葛藤を乗り越えられる年齢だからこそ、実践、話し合いがうまくいっているように感じる。
- 年長組が主体となる行事であるが、準備、当日の役割を年少、年中の担任教諭も担うことから「チーム保育」のよさが表れている。園全体の状況を共通して把握していることが伺える。
- 子どもたちにも「縁日」のイメージが出てきた。5つブースがあるうちで、担当したい店を3つ考えてくる方法はよいと思う。今回の提案にもあった迷路の店では、話し合いを通してイメージ、アイデアも豊富であり、子どもたちの主体的な力の発揮が感じられる。教師が決定しすぎることなく、子どもたちのアイデアをうまくいかしている。育てほしい10の姿にもある「思考力の芽生え」が育つ環境が作れている。また、迷路の完成図を作ることでイメージの共有もでき、子どもたちにも自立心が芽生える。「時間がかかって大変」「間に合わない」という問いに対して、どうしたらよいか考える素晴らしさが見られた。発言、行動としても迷路に向かっており、わくわくして活動している。また、教師がそれをいかしている。
- 「縁日」の行事後に、保護者へのアンケートを配布するのはよいアイデアであった。子どもたちは工夫したところを喜んでもらったことに気付くことができる。保護者理解も深められる。さらに、「縁日」の活動自体が環境を通して学ぶ活動となっており、年長児にふさわしく、特性をいかした行事になっている。次の学校生活に向けてもよい活動だと感じた。次期の指導課題にも向き合っているところもよいと思う。